

## 明治31年の大水害

明治31年は、4月中旬の雪解け時期から毎月のように洪水が発生していました。このため石狩平野の低湿地帯は水をたつぷり含み、排水が悪いため、方々で水が溜まり沼や湖のようになっていました。

このような状況のなかで、8月下旬から低気圧が相次いで日本列島を襲い、暴風雨になりました。8月31日の低気圧は、北海道を横切り12時間に71・5㎜の降雨量をもたらし、あちこちの沼や湖が大きくなっていました。

9月2日から4日にかけての連続した激しい雨により石狩平野の水面は大きく広がってしまいました。

さらに9月7日から10日までの4日間に158㎜の降雨量があり、神居古潭での最大流量は1秒間に3,560m<sup>3</sup>に達しました。

石狩川支流の雨竜川や空知川、夕張川などは、両岸の原野に水が氾濫し、幅約40km、延長約100kmという巨大な湖となりました。これは滋賀県の琵琶湖が2つ分の大きさ

さにあたるものです。

この年の7月に完成したばかりの砂川・旭川間の鉄道は、完成後わずか2カ月でこの洪水のために流失してしまいました。



明治31年の水害(砂川市)



明治31年の水害(岩見沢市)

川は急激に水を増し、ゴーと不気味な音を立てて流れ、あふれた水で両岸の畑は一面が湖のようになりました。空知太(現在の滝川市)に住む沿岸の人たちは高台がないため、やむをえず家の2階に避難しましたが、水はじわじわと床上から階段まで浸水してき

ます。窓から外を見ると、屋根にあがって助けを求めて泣き叫ぶ人もいました。「もうだめだ、家が流されてしまう。」と、恐怖に震えていると、工兵隊の人たちが、舟を漕いで助けにきてくれました。

砂川付近の被害の様子を新聞は「味噌醬油類も樽桶のまま流失せしもの多ければ塩梅に苦しみ、且つ濁水を以てにたきするより到底食するに堪ゆらざれども罹災農民はやむなくこれを食せり」と報道しています。

江別では1時間ほどで、ほとんどの家が床上に浸水しました。石狩川河口に近い石狩町生振の住民は「朝起きてみると、花畔(生振の対岸)の小屋の周りも二面の海である。付近の農家では屋根にあがってしきりに助けを求めている。船を指揮して、人や馬や荷物を乗せて堤の上に逃げた」と話しています。

## 風・雪・冷そして水害

当別は開拓以来、地理的・地形的に風害、雪害、冷害、水害に悩まされてきました。

風害としては明治18年、翌19年、22年、22年に大風に見舞われた記録はありますが、被害状況については明らかではありません。昭和29年9月に全道を襲った台風15号が各地に大きな被害をもたらしました。家屋等の被害は石狩管内で当別町が最も多く、全壊・半壊合わせて92戸にもなり、災害救助



昭和56年8月の水害

法の適用を受け、応急仮設住宅4戸・応急処理5戸を施工し義援金の募集もしています。森林の被害もかつてない大きなもので、全道で立木約2,360mといわれ、年平均伐採量の3倍に相当するものでした。当別町では中小屋・青山の町有林が壊滅的な被害を受けました。

本町の北部奥地は多雪地帯で、冬期間の雪害防除には毎年苦勞が尽きません。明治16年は10月に25cmの初雪で未収穫の大豆が収穫不能になりました。

低温のために農作物の生育不良で凶作年となった年も数多くありました。なかでも大正2年は5〜9月の低温で水稲は収穫皆無となり、損害額は40万円に及びました。

また水害においても、古くから甚大な被害を受けてきました。当別橋などは、明治13年と17年に2度も洪水で流失したのです。

全道に未曾有の被害をもたらした明治31年の大水害は、当別でも猛威をふるいました。1名の犠牲者も出さずにすみましたが、避難者は1,475名という数に達したのです。

9月8日午後5時から、当別川・石狩川が増水をはじめ、当別川では弁華別、川下方

面の畑地に浸水しました。石狩川も当別太、ビトエ、川下一帯が氾濫し、水深3m近くに及び、まるで大海のようだったといえます。住民は避難することもできず、屋根を破つて上にはい登り悲鳴を上げて、救助を求めているそうです。

明治37年には、6月末と7月初めに2回も洪水が襲い、田畑の作物の被害は甚大なものでした。当別川流域の青山から上流は、兩岸の山並みが迫り、川幅が狭いため水勢が猛烈で二帯が氾濫、青山渡船場の近くで激流にのまれた4名が死亡という痛ましい事故も起きました。

明治44年、大正11年も大洪水によって、農作物は大被害となり、特に低地の収穫は皆無という地域がしばしばありました。

昭和17年には、春独特の融雪洪水が起きました。この原因は3月21日ころから、降りたり止んだり雨と暖気によって当別川の水が溶け出し、流水のようになって当別川鉄橋に溜まり、増水した川をせき止めた状態になり、氾濫しました。この水は、当別市街の本通りを奔流となって流れ、瞬間に膝までの水深となって商店街を襲いました。

## 水害に泣く十津川郷移民

明治22年8月、奈良県十津川郷は集中豪雨により、死者168人、600戸、2,600人が家と土地を失い、水田の50%、畑の20%が埋没・崩壊の大惨事に襲われました。あまりの惨状に、この地での再建をあきらめ、北海道への移住を決めました。

災害から2カ月後、10月18日に十津川郷を出発。120km以上の道のりを歩き、神戸港から船に乗り、小樽に上陸したのが10月28日です。船の中で出産した人もいれば、病気で亡くなった人もいました。小樽から市来知(現在の三笠市)までは汽車を利用、その後目的地までは雪が降ったため道路がぬかるみ、馬車が使えず徒歩となりました。

11月、奈良江方面から北へ向かう、およそ800人の集団は列を組んで歩いていました。これから厳しい冬を迎えるというのに、衣服は夏物のような薄着です。体のがつちりした若者は老人や女、子どもをいたわるように、支えながら歩いています。連日の雨のため、馬車が使えないほどの泥んこ道です。脚絆も付けず、素足にわらじだけでした。ク

マザサで足を切り、血だらけの人もいます。体力が消耗して歩けない老人や子どもは、赤い服を着た空知監獄署(刑務所)の囚人に背負われたり、防寒具の代わりに囚人服にくるまれて囚人のかつぐモッコにさせられ、北へ北へと進みました。



昭和28年の水害 本町より上徳富を望む

空知太に到着し、屯田兵を志願した95戸はこの地に留まり、残りのおよそ500戸が新天地に向かいます。石狩川を渡り、目的地の徳久原野へ行くためには道路をつくり、渡船場を増設し、さらには橋もつくらなければなりません。災害から10カ月後ようやく徳

久原野へ入地します。

移住した人たちは、新しい村の名を「新十津川」と決め、こつこつと原野を切り開き新天地の建設に努力しました。

しかし、水害から逃れて北海道に来たはずでしたが、明治31年、石狩川の氾濫で未曾有の水害に襲われ、村の70%が水没してしまいました。

水害はその後も何度も襲いましたが、住民は歯を食いしばって頑張り続けました。水害・冷害に苦しんだ人々は打開策として水田の造成を始め、その努力の結果、現在では北海道の有数な米どころに発展しました。



新十津川町

## 空知川と

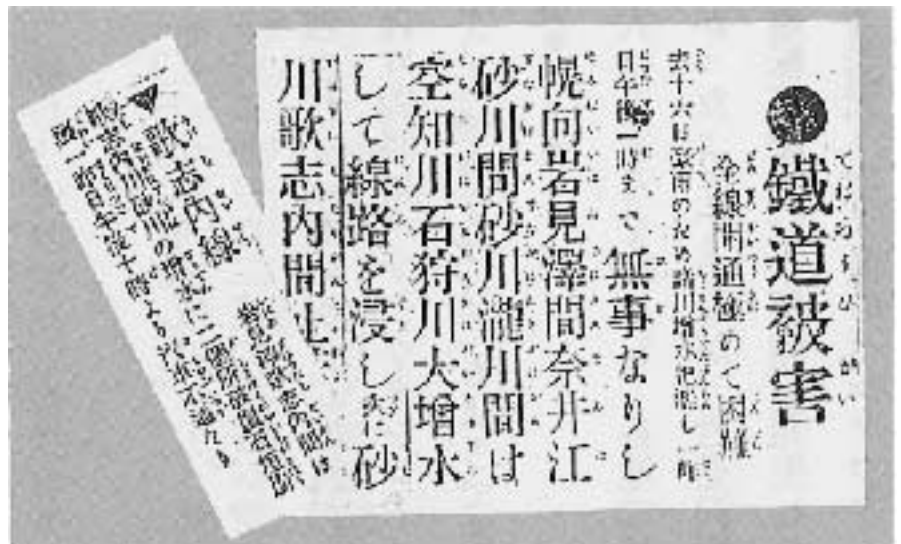
### ペンケウタシユナイ川の氾濫

歌志内市は、空知川の支流・ペンケウタシユナイ川の流域に沿って細長く山間部に開けた土地にあります。そのため、明治時代のペンケウタシユナイ川はその山間部を自然のままに流下する原始河川の面影を残していました。

明治31年9月6日、集中豪雨による未曾有の大洪水が発生して、道内の各河川が氾濫し、248人もの死者を出しました。空知川も大氾濫を起こして、流域に甚大な被害をもたらしました。

当時の新聞では「空知川沿岸は激流のため損害甚しく耕地の如き回復の見込みなきもの多く空知太付近の地は荒蕪に属する土地夥多にして何れも激流に際するの地は砂石となり、耕作覚束なし……。」このとき女性1人が溺死しています。

この時、ペンケウタシユナイ川も氾濫します。歌志内村の被害は、流出家屋70戸、浸水家屋34戸、溺死者1人、救助人員429人と記録されています。



大増水による鉄道被害の報道(明治44年)

また明治37年にも空知川とペンケウタシユナイ川が氾濫。収穫物は皆無となり、水田浸水20町歩、畑142町歩、道路流出5カ所、橋梁流出2カ所という被害が出ています。明治45年の水害でも、歌志内は甚大な被害を受けていて、流出橋梁7カ所、破壊橋梁6カ所、堤防決壊650間、破壊家屋2戸、



昭和37年、台風9号全市を襲う(神威地区)

床上床下浸水132戸、死者1人、水田浸水約30町歩、畑浸水約100町歩でした。大正11年の大水害では空知支庁全体で、117名の死者が出ました。昭和に入り18年、歌志内では2人の尊い命が水害で奪われています。昭和30年代に入っても、30年、31年、32年、34年、36年と連続して大きな水害に見舞われています。

昭和56年8月、空知全域で降り始めた雨は、500年に一度といわれる大水害の前触れでした。6日まで4日間の降水量は岩見沢・美唄・北村などで400mmを超えました。床上浸水家屋3千戸、農作物被害210億円に達しました。空知を縦貫する

大動脈・国道12号線が不通になり、国鉄各線が寸断され、空知管内の避難者は1万5千人に上りました。歌志内も開基以来最大の被害となったのです。